「グリーンピース」から「青豆」へ～『1Q84』後に読む『ノルウェイの森』

風丸良彦

1　一九六八年の真田堀

日曜日の午後のあたたかい日差しの下では、誰もがみんな幸せそうに見えた。土手の向うに見えるテニス・コートでは若い男がシャツを脱いでショート・パンツ一枚になってラケットを振っていた。並んでベンチに座った二人の修道尼（シスター）だけがきちんと黒い冬の制服を身にまとっていて、彼女たちのまわりにだけは夏の光もまだ届いていないように思えるのだが、それでも二人は満ち足りた顔つきで日なたでの会話を楽しんでいた。

（『ノルウェイの森』～以下、表記がない限り同書からの引用～第二章）

時は一九六八年五月半ばの日曜の午後、『ノルウェイの森』の「僕」ことワタナベトオルと直子が一年ぶりの再会を果たした直後であり、所はＪＲ（当時はむろんまだ国鉄）四ツ谷駅から市ヶ谷駅に向かう真田堀の土手である。名物の桜並木はすでに花は散り果て青葉に変わってしまったが、それでも「誰もがみんな幸せそう」であり、二人の修道尼（シスター）は「満ち足りた顔つき」で会話を楽しんでいる。この安寧でいて明るい状況はもちろん、物語上は、以後の「僕」と直子とに訪れる、行き場のない青春の一瞬を、すでに逆光の内におぼろげにとらえていたわけだが、いっぽう史実上は、迫り来る「影」を予期させる象徴的な「光」の光景として、その時、そこにあったものである。

真田堀の土手から一望できるグラウンドは、それを見下ろす上智大学の付属グラウンドと思われがちだが、実態は新宿区の管理化にある屋外運動場の一つであり、冬季を除く平日こそ上智大学専用であるが、日曜・祝日は原則的に新宿区・千代田区・港区在住・在勤の団体に開放されている。ただし、グラウンドに併設されているテニス・コートだけは古くから平日・休日を問わず上智大学の硬式テニス部がもっぱら使用しているようで、ショート・パンツ一枚でラケットを振っていた若い男は上智大生である可能性が高い。二人の修道尼（シスター）は言うまでもなく、上智大学に隣接するイグナチオ教会の関係者であろう（ちなみに、上智大学の設立母体であり、大学構内に寄宿舎もあるイエズス会は厳然たる男子修道会で、現在では女子色の強い上智大学が男女共学になったのは、一九五七年のことである）。

さて、「僕」と直子が一年ぶりの再会の時を刻んだその真田堀周辺では、それからわずか一ヵ月半後の一九六八年七月二日に、その後この年の暮れまで断続的に続くことになる騒動が幕を開ける（この時代の記録は「上智大学　光と影」というフィルムになって残されている。筆者が三十年ほど前に観たその映像では、学生たちが小競り合いを起こすモノクロ画像の背後に、バッハの「G線上のアリア」が流れていた）。

この日、午前四時、上智大学では、全学共闘会議の学生約六十人

（一部の報道では八十人とも伝えられている）が大学1号館を占拠し、同館をバリケード封鎖した。同会議は、六月五日にワンダーフォーゲル部部室で発生した盗難事件の際、大学側が構内に警官を入れたことを受け、革マル派、社青同解放派を中心に八日に組織されていた。十四日には早くも全学集会が開かれている。にわかに、という感もあるが、「僕」と直子が土手を散策していた五月にはすでに、文化団体連合会（文連）やソフィア祭実行委員会（ソ実）による無届けの集会が少なからず行われていた。したがって、『ノルウェイの森』冒頭のこの真田堀の光景は、文字通り嵐の前の静けさと言うこともできる。「僕」と直子の出会いが一ヶ月ちょっと遅れていれば、周囲がきな臭いにおいに覆われていたであろうことは想像に難くない。

七月二日深夜、バリケードが築かれたその日うちに学生たちの篭城は呆気なく解かれる。あるいはこの時の模様だったか、筆者はかつて学内新聞の縮刷版で、教室の窓から身を乗り出した神父が学生たちを説得する写真を見た覚えがあるが、神父ばかりでなく、校舎を封鎖する学生たちに反対する一般学生が大勢いたのである。篭城学生たちは、権力に暴力をもって立ち向かうなかれ、という一般学生の説得に折れた、と伝えられている。当時の新聞は、この説得を「キリスト教的」とも「良識」とも報じている。

しかし、もちろん全学共闘会議メンバーの闘争はこれで収束したわけではなく、篭城をめぐる大学側の学生処分（同年八月二十二日。退学九名、無期停学四名）に不服を唱え、処分撤回と政治活動の自由を求め、同年十一月七日から再び大学本部ならびに1、3、4号館を占拠した。十四日には、大学公認の学生団体「学生会」が封鎖排除活動を強行したが、失敗に終わっている。

そして、暮れも押し迫った十二月二十一日早朝。七百人もの警視庁機動隊員が大学構内に突入、ガス弾を使いわずか一時間で抵抗した学生を残らず逮捕するに至る。午前十時には大学正門前に鉄板のバリケードが立てられ、ここに当時の守屋美賀雄学長は、大学の六ヶ月間臨時休校を宣言するのである（実際には、三ヵ月半後の一九六九年四月八日に休校解除）。「警察の導入は私独自の判断で決めたもので、一切の責任は私が負う。学生同士の衝突で流血の惨事を繰返すよりは、警察の力を借りたほうがいいと考えた（中略）東大のように何もやらないでいることは私学にはできないことだ」（朝日新聞一九六八年十二月二十一日夕刊一面）と守屋学長は語っている。むろん、東大は最初から何もやらなかったわけではなく、同じ年（六月十七日）の安田講堂占拠学生排除の教訓から大学として公権力の出動を要請するのを自粛していたのであるが、上智大学が一契機となり、翌一九六九年早々には東大安田講堂に再び機動隊が導入され封鎖解除、その後、各大学でつぎつぎに機動隊が導入されるようになったのは周知の通りである。

さて、『ノルウェイの森』のテクスト上においては、「僕」と直子が一年ぶりの再会を果たした一九六八年五月（第二章）から、ほぼ一足飛びに（第三章ではもう）一九六九年一月へと時間が流れる。この間、二人が真田堀を再訪したか否かは明示されないが、その後の二人の交際は、「前と同じように街を歩き」「東京の町をあてもなく歩きつづけた」（第三章）と記されており、その中に再会の場所である真田堀が含まれていなかった、と想像するほうが難しい。しかし、テクストからは真田堀が混乱に陥った半年間の光景がすっぽりと抜け落ち、混乱に陥る前の初夏の穏やかな陽差しだけが降り注いでいる。そこに意図的な言い落としがあるのを認めざるをえなかったわけだが、その意図性は、デタッチメントを装いつつ、語られる歴史があるいっぽうで語られない歴史が存在したことを密かに主張してもいる。

2　標準語を話す二人

「ねえ、私のしゃべり方って昔と少し変わった？」と別れ際に直子が訊いた。

「少し変わったような気がするね」と僕は言った。

（第二章）

「僕は言った」に続けて、「なにより君、標準語を話してるもの」と思わずつっこみを入れたくなる場面である。いっぽう直子の側からも、「そういうあなたもね」と切り返されそうな場面でもある。二人のしゃべり方は「少し変わった」どころではない。いかんせんこの時点では、「僕」も直子も進学のために神戸から東京に出てきてせいぜい二ヶ月しか経過していない。にもかかわらず二人は、あたかもそれが自然なことのように標準語で会話をしている。思えばデビュー作の『風の歌を聴け』からすでに、それが神戸を舞台にした物語であるのに、登場人物たちは標準語を駆使していたのである（『ノルウェイの森』第五章には、「耳遠いから、もっと大きな声で呼ばんと聞こえへんよ」と京都弁を喋る女の子が出てくるが、その場面にはあえて「と女の子は京都弁で言った」と添えられている）。そして、彼らの言葉づかいこそ、その作品を読者に「都会的」と印象づけたひとつの根拠でもあった。これに関連することを、最近になって村上はつぎのように語っている。

東京に出て来て、それで小説が書けるようになったのかなと思うもう一つの理由は、言葉の問題です。僕は関西生まれの関西育ちだから、大学に入るまでは当然何の留保もなく関西弁をしゃべっていた。バイリンガルだからいまでもあっちに帰って、知ってる人に会うとすぐネイティブに戻っちゃうけど、東京では完全に東京の言葉でしゃべっています。それは結局のところ、第二言語なわけです。（中略）

しかも最初の『風の歌を聴け』のときは、冒頭の数ページは英語で書きました。僕は高校時代からずっと英語の本を読んでいて、仕事を始めてからも英語で本を読むという習慣を続けていたんで、ほかの言語に移してものを考えるという癖も、ある程度日常的についていたわけです。関西弁から東京の言葉、東京の言葉から英語という、三段階のステップを踏んで、その重層化された言語環境があったから、自分なりの文章をこしらえていけたということもあるように思います。

（「考える人」二〇一〇年夏号「村上春樹ロングインタビュー」）

拙著『越境する「僕」』（試論社、二〇〇六）でも触れたが、村上文体の文章構造上の翻訳文体性は決して真新しいものではない。『ノルウェイの森』にはつぎのような一節がある。

しかし僕が脆弱な仮説の上に築きあげた幻想の城はレイコさんの手紙によってあっという間に崩れおちてしまった。そしてそのあとには無感覚なのっぺりとした平面が残っているだけだった。直子がもう一度回復するまでには長い時間がかかるだろうと僕は思った。そしてたとえ回復したにせよ、回復した時の彼女は以前よりもっと衰弱し、もっと自信を失くしているだろう。（第十章）

いっぽう、たとえば葛西善藏の『哀しき父』（大正元年）にはつぎのようなくだりがある。

けれども偉大なる子は、決して直接の父を要しないであらう。彼は寧ろどこまでも自分の道を求めて、追うて、やがて斃るゝべきである。そしてまた彼の子供もやがては彼の年代に達するであらう、さうして彼の死から沢山の真実を学び得るであらう。

いずれの文章も「しかし……そして……そして」「けれども……そして……そして（さうして）」で繋がれている。また、両者ともに引用の文尾は「だろう（であらう）」で終わっている。頻出する接続詞

と未来予測がそれら文体の特徴であり、そこには明らかに、明治期以降に日本語文体に侵食してきた翻訳調文体（but、and、will）の影響を共通に見てとることができる。両作品の発表年の間には七十年以上もの時が開いており、その間こうした文体は日本語の中にそれこそ溢れかえっていたわけであるが、それでもなおかつ、村上文体が現代において「翻訳調」を読者に印象づけたとすれば、こうした構造的な翻訳調文体以外の何かが読者に「翻訳調」を感じさせたと考えざるをえない。

そのことに対する答えが現在になって村上から提示されたことになる。すなわち、村上文体の翻訳調は、英語（欧米語）―日本語の翻訳回路ばかりでなく、関西弁―標準語の翻訳回路も加味されて成り立っていたのだ、と。先のロングインタビューで村上は、「僕の書く文章に、もしほかの人と違うところがあるとすれば、そういうこと（重層化された言語環境）もいくらか関係しているんじゃないかな」と続けている。見方を換えれば、初期三部作や、また『ノルウェイの森』も、そもそもが（関西弁から標準語への）翻訳小説だったのである。そしてその日本語から日本語への翻訳過程には、少なからず英語脳が関与しているようでもある。

と言うのも、先の「少し変わったような気がするね」という「僕」の台詞ひとつをとってみても、それは標準語を操る十八歳の若者の言葉として自然だろうか。一九六〇年代後半には実際に、若者が「……気がするね」といった親父臭い言葉を操っていたのかもしれないが、より自然なのは、「ちょっと変わったかな」や「変わったかもしれないな」あたりではないか。「少し変わったような気がするね」という言い回しには、'I think you've changed a little bit.'といった類の英文が透けて見える。さらに、

「でも君と話ができてよかったよ。だって二人で話をしたことなんて一度もなかったものな」（第二章）

などはまさに、

'But I was glad to talk with you, since we've never talked in a couple.'

といった典型的な英語の言い回しの、模範的な翻訳文のように感じられる。

つまり村上は関西弁を標準語にする際に英語を介している、そうした可能性が浮かび上がる。もちろんそれは、結果的に自然な標準語とはなりえないわけであるから、いまあらためて『ノルウェイの森』の会話文体に目を向けると、歯が浮くような場面が随所に認められる。たとえば、先の「……ね」について言えば、

「共同生活ってどう？　他の人たちと一緒に暮すのって楽しい？」と直子は訊ねた。

「よくわからないよ。まだ一ヶ月ちょっとしか経ってないからね」と僕は言った。「でもそれほど悪くはないね。（後略）」（第二章）

といった「ね」が語尾に続く「僕」の口調は、標準語は標準語でも、人工的につくられた標準語を思わせる。たとえて言うなら、競馬新聞の調教師や騎手のコメントに頻出する、「馬の調子はそれほど悪くはないね。ただ、休み明けからまだ一ヶ月ちょっとしか経ってないからね」のような標準語口調である。ことに関西系の調教師や騎手のコメントがこのように標準語翻訳される時、えも言われぬ居心地の悪さを感じることがしばしばある。他方、その居心地の悪さこそが、「言語的中心」そのものの不安定さを露呈する。

3　二項対立図式の拒否と「青豆」の登場

死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。

第二章終盤に現われ、その後『ノルウェイの森』全体を支配することになるこの言葉は、この時の「僕」をして、「それを言葉としてではなく、ひとつの空気のかたまりとして身のうちに感じたのだ」とされるが、その根底にある思想は以降、村上自身のうちに確かなかたちをまとい、そして、わだかまる空気のようなものではない、強固なかたまりとなっていったようである。

罪を犯す人と犯さない人とを隔てる壁は我々が考えているより薄い。仮説の中に現実があり、現実の中に仮説がある。体制の中に反体制があり、反体制の中に体制がある。そのような現代社会のシステム全体を小説にしたかった。ほぼすべての登場人物に名前を付け、一人ずつできるだけ丁寧に造形した。その誰が我々自身であってもおかしくないように。

（「読売新聞」二〇〇九年六月十六日朝刊）

右に籠められているのは、単純な二項対立図式への疑義であり嫌疑であるのは言うまでもない。そうした思想の萌芽のようなものを、いまあらためて『ノルウェイの森』（あるいはそれに先立った短篇「蛍」「めくらやなぎと眠る女」）に見出すことができる。この「読売新聞」のインタビューは『1Q84』のBOOK1・2が刊行された直後のものであるが、こうした二項対立図式（によって単純化される社会状況）に対する村上のスタンスを表明するうえでのひとつの集大成が、『1Q84』という物語であったと言うことができる。

詳しくは拙著『集中講義『1Q84』』（若草書房、二〇一〇）に記したが、『ノルウェイの森』の「**死は生の対極としてではなく、その一部として存在している**」同様ゴチックで表記される『1Q84』の「**見かけにだまされないように。現実というのは常にひとつきりです**」は、作中で、「世間のたいがいの人々は、実証可能な真実など求めてはいない」（BOOK2第11章）、「君が目にしたのは観念の姿だ。実体ではない」（BOOK2第13章）、「彼女は概念でもないし、象徴でもないし、喩えでもない。温もりのある肉体と、動きのある魂を持った現実の存在なんだ」（BOOK2第16章）といったように噛みくだかれる。これらを煎じ詰めれば、世界は多くのしるし（見かけ）で充たされているが、それらが究極的に紐づけする意味（現実）は一つだけであるということになり、そのように考えれば、「見かけ」は「現実」へと吸収されていくべきものであり、それら二つは決して対立構図の中にあるものではない、そうした見方に行き着く。これは紛れもなく、「**死は生の対極としてではなく、その一部として存在している**」の読み替えとみなすことができる。

このように『ノルウェイの森』では「ひとつの空気のかたまり」であったものが実像を伴うようになったその過程に、オウム真理教による地下鉄サリン事件を扱ったノンフィクション『アンダーグラウンド』がある。

マスメディアの依って立つ原理の構造はかなりシンプルなものだったと言える。彼らにとって地下鉄サリン事件とは要するに、正義と悪、正気と狂気、健常と奇形の、明白な対立だった。

（『アンダーグランド』あとがき「目じるしのない悪夢」）

ここに籠められているのは、二項対立によって単純化される社会図式、そうした図式を安易に組み立ててしまう社会システムへの村上の苛立ちに他ならない。そのような現実を神話化する行為は結局のところ、オウム真理教が紡ぎあげた「荒唐無稽のジャンクの物語」（『アンダーグランド』あとがき「目じるしのない悪夢」）のその物語行為と相反し

ないのではないか。そこに強く、村上の懐疑的眼差しが注がれているのは確かであろう。そしてそれが、「仮説の中に現実があり、現実の中に仮説がある。体制の中に反体制があり、反体制の中に体制がある。そのような現代社会のシステム全体を小説にしたかった」という、『1Q84』執筆にあたっての、村上の物語に対する姿勢へと綿々と貫かれたと見なすことができる。その「体制の中に反体制があり、反体制の中に体制がある」を『アンダーグラウンド』あとがきにあてはめれば、「正義の中に悪があり、悪の中に正義がある」「正気の中に狂気があり、狂気の中に正気がある」に置き換えられる。これらは言うまでもなく、『1Q84』の青豆や宗教組織「さきがけ」の造形の根本にあるものである。

さて、その青豆について村上は、「青豆という名前を思いついたときに、あ、これはいけるな、と思った」（「考える人」二〇一〇年夏号「村上春樹ロングインタビュー」）と語っているが、あらためて『ノルウェイの森』を読んでみると、実は、物語終盤、「僕」と緑が食事をする場面にも「青豆」が登場している。

僕らは台所のテーブルでビールを飲みながら天ぷらを食べ、青豆のごはんを食べた。（第十章）

「青豆のごはん」の「青豆」は、ほぼ間違いなく「グリーンピース」であろう。つまり、村上には「グリーンピース」を「青豆」と呼ぶ習慣がある。ここに、「正義の中に悪があり、悪の中に正義がある」「正気の中に狂気があり、狂気の中に正気がある」が微妙に重なり合う。すなわち「青豆」は「グリーンピース」を介して、強い正義感と使命感のもとに活動し、しかし時として、その首尾一貫した思想からくる行動を世間は非合法的と見なすこともある、もう一つの「グリーンピース」に行き当たる。

（了）

（朝日新聞、毎日新聞、読売新聞各紙の昭和四十三、四年の縮刷版を参照した。）